



## マイクロチップ

情報広報部 宮本慎一

こここのところ、食の「安全」や「安心」という言葉をしばしば見かけるようになりました。O-157や牛肉のBSE、食肉の偽装、輸入食品の残留農薬、遺伝子組換え野菜といった問題が次々と発生したことで消費者の食品に対する信頼は大きく揺らぎ、いまや食の「安全」の確保は国民的課題になりました。こうなると「安全」、つまり科学や理屈の問題だけではなく、「安心」という人々の心理上の問題も重要になります。こうした背景の中で、食品の生産履歴や流通履歴などの情報を連鎖させて作業を効率化し、消費者に対して効果的に情報を提供する食品トレーサビリティという取り組みが注目されています。牛肉は2003年12月施行の牛肉トレーサビリティ法で、生産履歴の公表が義務化されました。豚肉についても生産・流通履歴管理システムが導入されて、年間7万5千頭を生産する秋田県小坂町の農場・十和田高原ファームでは生後間もない豚の耳にICタグを付ける作業が昨年11月から続いて、主要販売先の大手スーパー・イオンは識別番号を商品ラベルに示して売っています。ICには11桁の個体識別番号が付され、農場では餌の種類、病気の有無といった情報を携帯端末で記録しています。消費者はインターネットで豚の生産履歴を照会することが可能で、どんなえさを与えた豚が最終的にどんな肉質になったかを、識別番号から逆に探ることもできます。

ICを使う技法は食品にとどまらず、ペットの分野にも利用されています。ペットブームといわ

れていますが愛犬家のマナーは年々低下し、厚生省の調べによると1996年度末における飼い犬の登録頭数は約480万頭。対する徘徊犬の捕獲・抑留頭数は21万頭にもものぼり、今なお加熱する愛犬ブームの陰の部分、ペットにおけるマイクロチップ導入の理由ともなっています。阪神大震災では兵庫県内にあふれた徘徊犬や徘徊猫の処分に対処した地元獣医師会の経験から、マイクロチップが導入されていれはばすぐに飼い主がわかるのに、ということを感じたそうです。マイクロチップにはICが封入されていて、読み取り機を近づけると、そこに書き込まれた固有のIDナンバーが表示されます。番号は犬の種類や色、飼い主の連絡先などの情報とともに集中管理センターに登録されているので、問い合わせれば犬の身元が一発で判明するという仕組み。いまのところマイクロチップを埋め込まれた犬は全国でもそう多くはないようですが、法的に義務付けられるようになれば、もはや善いも悪いもない。犬たちは首輪に鑑札をぶら下げる代わりに、マイクロチップを埋め込まれる。埋め込まれていない犬は野良犬とみなされ、有無を言わず殺処分と相成ります。

国民総背番号制度が導入された暁には、人間もやがてこの犬たちのように扱われ、操られることになるかもしれません。マイクロチップ以外にも方法はあります。たとえば肉眼では見えないバーコードがそれ。人間の身体そのものにIDを持たせてしまえばICカードを携帯させたときのような紛失の心配もないのです。

篠田節子の小説「斎藤家の核弾頭」で、主人公の斎藤総一郎の腕にいつの間にか埋め込まれ、厚生省の中央コンピューターと結ばれていたマイクロチップ。もはや小説の世界の話ではありません。近い将来、新生児には必ずマイクロチップが埋め込まれる。そして次には国民すべてがマイクロチップの埋め込みを義務付けられる。埋め込みを断ったあなたには、国の隠密が深夜に忍び込んであなたの知らない間にマイクロチップを埋め込みに来るかもしれません。あなたの手首あたりに、心当たりのない小さな傷はありませんか。